

九月五日

GA杉田インタビュー。星の子愛児園について話す。杉田が聞き上手になっていて、こちらも思はず、あらぬ事を口走ってしまった。どうも杉田は生のデザインというような事を考えているようで、モダン・リヴァイヴァルは死のデザインだと規定しているような気配があった。その当りを突込まれたが、良く解らなかったので笑ってごまかした。しかし、若い編集者で俺を手こずらせる奴が出てきたなと実感した。杉田の良いところはいつも真正面から来ることだ。変に斜に構えたり、いささかの遊びも無いところが良い。若さの才気換発なんてアツという間に消えてゆくのだから、正面からくるのが一番なのだ。しかし、アイツ何を考えているのか、いささかの好奇心が湧く。

九月六日

研究室は千客万来。

夕方、新宿でオゾン館長若宮氏、川島氏と会い、十一月六日からのA3ワークショップTOKYOの打合わせ。

夜、東北から佐々木所長、高橋工業社長上京。世田谷で色々現場の悩みを聞く。もうすでにゼネコンには面白く、好奇心に溢れた仕事をする意欲も、人材も居なくなつたという事を目の当りにしているってコト。

佐々木・高橋とは運よく巡り会つたのだが、この運も放つておけば散ってしまう。たいした事は出来そうにないが、アトリエ海

の成長には何がしかの事をしたい。

ゼネコン以外の建設方法を探る一つの方法だろう。

九月七日

朝九時渡辺さん夫妻世田谷に。杉並の家について打合わせ。お二人共に自分の世界を持って良く意見を述べてくれるので面白い。大体要求は現段階では出尽くしたと思われるので構法のデザインに進んでゆく。スタイルは大方世田谷村の感じで良いのかも知れない。クライアントをあとではいけない。彼等は一瞬のうち世田谷村の価値を見抜いている様子がある。これまでの私はどちらかと言えば、クライアントをリードしてきた。そうせざるを得ない感じがあったのだが、渡辺夫妻と対面していると私の立場と、彼らの立場が完全に平等になっている風がある。これは良い事だが、私の今までのやり方の修正を本格的に考えなければいけない。彼等が本当に何を求めているのかを二ヶ月くらいで知る必要がある。

子供たちにも会う必要がある。

奥さんは台所を自分で作る。亭主はハイとデッキと床貼り、子供三人は子供のコーナーをつくる。それを私のスタッフが補助する。子供の参加が重要だ。小中学生の頃に家づくりに参加するという体験はどれ程に、子供の想像力を刺激するか計り知れない。

渡辺さんの家の現場では「子供家づくり教室」を実現しよう。土、日は一家で家づくり、なのだ。

あの年代で家を作るのは珍しいのだろうが、家作りには一番良い年代ではないかとも思う。私の世田谷村はもう、少し遅きに失した嫌いがある。子供が年を取り過ぎていて、家作りに参加できなかつた。小中学生の頃だつたらと思う。ともあれ、渡辺さんの家作りを家族による家作りの第一号とする。

聖徳寺計画、松崎町森文再生計画、社長若松社屋計画、それ
ぞれ打合わせ。

ようやく夏のワークショップの疲れが抜けてきた様な気もする
が、油断大敵だ。夜、高木、松井両君が結婚します、のアイサツ
に来てくれたが、地下室での宴会はほどほどにしてアトは若い諸
君に任せて引上げた。

九月八日 土曜日

聖徳寺のアイデアがようやく出現してきた。屋根の一部が参道
からのラインと合体して、長い花畑になるというモノ。墓地の花
畑と屋根の花畑が一体となれば、死にゆく人々へのいささかのな
ぐさめになるだろう。